

活動停滞から、発展プログラムの模索へ

兼松泰男

挑戦的研究部門 RoboLabo プロジェクト

令和元年、学生グループの大半が大学院へと進学し、所属研究室の活動の比重が大きくなったため、RoboLabo プロジェクトの活動を担うのが困難となった。活動の中心となる新しいメンバーの加入が必要となったが、そのための方策を打てないままの状況が続いた。その結果、会合は開催したが、実際の活動は、ドローン自作と、ドローン活用スポーツ解析の検討など、個人的な活動に留まり、報告に足る成果を出すに至らなかった。

令和二年、新型コロナウイルス感染症への対応のため、課外活動が制限され、活動を停止した。創造的な学びの場を強化するという見地から、RoboLabo プロジェクトの後継発展プロジェクトを検討し、基盤となるフレーム形成に着手した。

発展プロジェクトのフレーム「サイエンス・キャラバン（仮称）」

創造的研究とその担い手が育ち、外部と健全な関係を結ぶ、アカデミックエコシステムを、いかに新生・再生させていくのかという視点から、大学とそれを取り巻く環境を分析し、さまざまな試行を経て、新しいシステムへとシフトさせていく必要がある。このシフトに資するセンターの果たす役割を考える時、「基礎理学プロジェクト研究センターの次世代機能として、外部リソースをいかに活用し、次世代育成環境を形成していくか」は最重要課題のひとつである。外部リソースを活用して、受け皿となる人的、財政的な基盤を確保し、その基板の上に、自生する集団（チーム）が安定的に複数存在するようにプログラムを構成することが必要である。

1990年代以降のポストバブル期の科学技術政策の一連の流れ、2000年代の国立大学法人化と引き続く改革政策の中で、大学には、かなり重い負荷がかかっている。新しいプロジェクトを主体的に遂行するには、疲弊し過ぎているというのが、現場の実感である。このような状況において、取りうる方法のひとつが、大学内外のネットワークの形成と外部リソースの活用であり、そのための理学研究科に相応しい「共創」についての検討と推進が求められる。

新たな「共創」に向け、まず一步を踏み出すために、対話と実践のためのフレーム「サイエンス・キャラバン（仮称）」を立ち上げることにした。そのために、現状改革に向けて意志と意欲のある個人、かつ、基礎理学の魅力を理解し、健全で旺盛な知的好奇心があり、サイエンスを渴望する人々に依拠したネットワークを形成していく。このフレームは、はじめから、明確なデザインがあるということではなく、対話と実践の積み重ねの中で、多くの意志と行動が重なり合って、方向性やスタイルが形づくられていくことを期待している。アカデミックエコシステムのコアとなる、そして、有為の人々が集うフレーム「サイエンス・キャラバン（仮称）」を形成し、モデルケースを産み出すことに、令和三年度、注力する。

研究業績リスト

I 査読論文

該当なし

II 国際会議等における発表

招待講演

Transient Absorption and Emission Spectroscopies to Develop Solar Energy Conversion Devices

Yasuhiro Tachibana

Ultrafast Spectroscopy Symposium at Swinburne

2020年2月10-11日

Swinburne University

III 国内会議等における発表

該当なし

IV 著書

該当なし

V 受賞と知的財産

該当なし

VI その他研究業績、発表文献

該当なし